

〔論 文〕

## 『マンズフィールド・パーク』における秩序と再生

Order and Restoration in *Mansfield Park*

入 野 賀和子

Irino Kawako

ジェイン・オースティンの作品に登場する父親達は、娘の教育には概して余り熱心ではないか、もしくは全く関心のない場合が多い。家柄の立派さと容貌の美しさが判断基準の全てであるサー・ウォルター・エリオットは、自分と性格も似ていて美貌が自慢の長女以外の二人の娘に対しては全く関心を示さないどころか、冷淡でさえある。またベネット氏は、自ら末の三人の娘を愚かな娘達と言って憚らないし、家庭生活の煩わしさから逃れるために書齋にこもるか、あるいは彼女達の愚かしさを嘲笑の種にする皮肉屋である。末娘のリディアが友人の大佐夫妻からブライトン行きの誘いを受け、同行を許して欲しいとうるさくせがんできたときも、次女のエリザベスが危惧の念を伝えたにも関わらず、許可しないかぎり自分の静かな生活が保たれないと、さっさと承諾を与えてしまう。あるいはまた、ウッドハウス氏は、自分の娘に欠点があるなどとは思ってもよらず、何事であれ娘が一番だと信じている放任主義の父親である。彼等は皆、父親としての責務の一部を放棄している人物として描かれているが、それは同時に、彼等が所属する上層ジェントリー階級の家長として自らが所有する地所や財産に対する管理能力への何らかの欠如をも示唆している。ベネット氏は、所有地に限嗣相続の設定がなされているにも関わらず、娘達の将来に備えて計画性を持って財産管理を行うどころか、漫然とした管理を続けている。また、サー・ウォルターに至っては、自らの浪費と所有地の管理能力の完全な欠如により、最終的には屋敷を出ざるを得なくなる。

ところが、マンズフィールド・パークの当主サー・トマス・バートラムは、そのような無責任な父親像とは異なり、バートラム家繁栄の根幹を成すのは子供達の教育にほかならないと考え、息子だけでなく娘の教育にも積極的に関与していく父親である。そして教育熱心なサー・トマスは、土地財産の有能な経営管理者でもある。イートンやオックスフォードといった教育制度に則った教育が行われる息子達とは異なり、特に家庭での教育が中心となるマライアやジュリアの教育には細心の注意が払われ、自ら教育者としての役割を担い、子供達の知識の熟達度を測り、才芸、礼儀作法など最上の教育が施される。

…ミス・バートラム達は記憶力の訓練や二重奏の練習を続け、そして次第に背も伸び、女らしくなっていく、父親の目には容姿や、物腰、たしなみにおいてもすべて申し分ないものに映った。…娘達がバートラムの姓でいる間は、その名前に新たな品位を与えてくれるはずで、また姓が変わるときには立派な姻戚関係をもたらししてくれるものと父親は確信していた。<sup>(1)</sup>

しかし、「記憶力の訓練や二重奏の練習」といった些末な教育内容の表現の中に、もうすでにかすかに皮肉な調子が入り込んでいる。マライアもジュリアも知識や才芸の面では父親の期待に十分応え得るものでありながら、その教育には致命的な欠陥があり、自己認識や自己抑制、謙虚や寛大といった心の教育がないがしろにされていることに、サー・トマスが気付いていないことが作品の冒頭部分ですでに述べられている。父親としての責務に忠実でありながら、サー・トマスの厳格で威圧的な態度が娘達を畏縮させ、父親の前では決して本心を表すことのない娘達にしてしまっている。娘達にとっては、サー・トマスは抑圧、抑制、束縛の象徴でしかない。

『マンスフィールド・パーク』では、家父長としてサー・トマスが象徴する伝統的な権威や秩序への忌避、あるいは挑戦のパターンが繰り返し展開される。本論ではサー・トマスと娘達との関係に焦点を当てながら、オースティンが提示している秩序の概念を探ってみたい。

## 1

物語が始まってすぐに、サー・トマスは舞台から姿を消し、再び登場するのは第二巻以降である。サー・トマスは、娘達にとって人生の一番大事な時期に家を離れ、西インド諸島にあるアンティグア島の財産管理のために二年間も家を留守にしなければならない事態に陥る。アンティグア島での地所管理を長年代理人に任せておいたことから生じた財政状況の悪化を立て直すために、サー・トマス自らが出向いていかざるを得ない。オースティンは物語の展開上、サー・トマスの長期に亘る不在を可能にするために、植民地アンティグア島への渡航を作品に持ち込んでいる。一義的にはアンティグア島の作品への導入は長期不在のもっともらしい理由としての意味合いを持つが、それと同時に、アンティグア島における適正な管理者不在による事態悪化という状況は、逆にマンスフィールド・パークの管理者不在による混乱と無秩序の可能性の暗示へと繋がっていく。

マライアとジュリアにとって管理者たる父親の不在は、あらゆる束縛からの解放を意味している。また、サー・トマスの善意に感謝しつつも、峻厳な態度に畏怖の念を禁じ得ないファニーにとっても、彼の不在は緊張感からの解放をもたらしてくれる。ただし、ファニーはそれまでのサー・トマスの恩義を感じながらも、彼の出発を悲しく思えない自分を恥じて悲しむのだが。言わば権威と秩序の空洞化が起こったところに、外の世界から入り込んでくるのがクロフォード兄妹である。クロフォード兄妹はバートラム姉妹とは対照的に、両親はすでに亡くなり、後見人でもあった叔父の提督からも独立して自由気ままな暮らしをしている。「すべてのものは、金さえあれば手に入るという正真正銘のロンドン式処世術」(52)を身につけた彼等は、洗練された都会風の優雅さや機知のある会話で、バートラム家の兄弟姉妹を魅了する。

オースティンが生きた19世紀初頭は、まさに伝統的な地主階級が保持してきた調和と安定の世界が、産業革命の進展と共に、新奇さと変化を志向する衝動的で流動的な時代の波に飲み込まれようとしている時代である。『マンスフィールド・パーク』に関して、タナーは「静止と変動、安定と変化、つまり移動と不動について書かれた小説」であると述べているが、同時にこの作品の背後には静止から流動へと劇的に変化していく時代の潮流があることを常に念頭に置いておくべきだとも指摘している。<sup>(2)</sup>オースティンは、この作品でファニーと

サー・トマスが象徴する秩序と静止の伝統的な社会と、クロフォード兄妹が象徴する衝動的で流動的な社会を対比させ、登場人物達の「活動性」によってどちらの世界に属するのかが鮮明に区別立てしている。ファニーが身体的に虚弱で、少しの運動でも疲れやすいというのは大変象徴的である。ファニー以外のほとんど全ての登場人物達は、エネルギーで、変化と新奇さを求めて活発に動き回る。彼等の活力と迫力に飲み込まれそうになっているファニーは、次々と襲ってくる新たな時代の波に飲み込まれようとしている伝統的社会を想起させる。

オースティンは、地方の伝統的社会と都会の欲望充足的社会との軋轢を描き出すのに様々な比喻を用いている。例えば「ハーブ」と「荷馬車」のエピソードは、ロンドンの価値観と地方の価値観との対立を象徴したものと言える。メアリ・クロフォードが、マンスフィールドの牧師館に滞在し始めてまもなくの頃、取り寄せたハーブを牧師館まで運ぶために、荷馬車を近所の農夫から借りようとしたことで周りの人々から鬻ぎを買ってしまう。メアリにとっては荷馬車を借りることは、単に金銭で解決できる問題でしかないが、ちょうど干し草の収穫の繁忙期にあった農夫達にとって、荷馬車は干し草の収穫という生活そのものに関わる問題である。メアリの自己中心的な振舞が、はからずも周囲との軋轢を生み出してしまうが、ロンドンの処世術が全く通用しない「田舎の習慣の頑固なまでの独自のやり方」(52)が、マンスフィールドには厳然として存在している。

虚弱なファニーとは対照的にメアリは、活動的である。メアリが乗馬への関心を示すと、エドマンドの指導の下でたちまち上達し、臆病なファニーが驚嘆してしまう速さで馬を乗りこなしてしまう。「私はとても丈夫にできていますから、疲れることなどありませんわ、自分が嫌なことをする場合は別ですけど」(62)と、メアリは身体的な強さと行動力を自慢する。健康上の理由からファニーが乗馬を日課としていることを知りながら、メアリは乗馬の愉しさからファニーが乗るはずの馬を独占してしまう。

「ねえ、ミス・プライス」と、ミス・クロフォードは声が届くところまでくるとすぐに言った。「お待たせしてしまったお詫びを申し上げたくてまいりましたのよ。でも、言訳はできませんわね。大変遅くなり、とてもひどいことをしてしまいましたもの。ですから、どうか許してくださいね。我儘はいつだって許してもらいよりほか仕方ありませんものね、だって治る見込みはないのですもの。」(61)

クロフォード兄妹の「治る見込みのない」自己中心性は、都会的に洗練された振舞や会話に巧妙に包み込まれ、優雅なほどに幻惑的であるが、より無防備で洗練度において劣るバートラム姉妹に比べるとはるかに危険な様相を帯びている。

サー・トマスという権威不在の状況下、自らの欲望に突き動かされる自己本位的な衝動が、バートラム家そしてラッシュワース家を巻き込んでいく。ラッシュワースの屋敷であるサザトン・コート庭園改修案に端を発したサザトン訪問は、それぞれの自己本位的な欲望をさらに鮮明にさせることになる。由緒ある家柄のラッシュワース家の屋敷にもすでに時代の変化が入り込み、先代当主の時代から屋敷内のチャペルは使われなくなっている。言わば屋敷の中に精神的空洞ができてしまっているようで、ファニーは家中の者が祈りのために決まった時間集まる、昔からの価値ある習慣がなくなってしまったことを残念がる。しかしメアリは、信仰はあくまでも個人的な好みの問題としてしか捉えていない。

「そういう問題は、それぞれのやり方に任せておくのが無難ですわ。誰だって自分の思いどおりにするのが一番ですもの。自分の都合のいい時間とか、自分流の礼拝の仕方を選ぶことだって。参列の義務とか堅苦しい儀式、束縛や時間の長さ、どれをとってもぞっとすることばかりですわ。そんなの、誰だって好きじゃありませんもの。もしあの張出席に跪いて、あくびをしていた善良な人達が、目がさめて頭痛がするので、あと十分ベッドで横になっていても、礼拝に出ないからといって非難される心配のない時代が来ることを見越せていたら、嬉しさと羨ましさで小躍りしたことでしょうね…。」(78)

ここでのファニーとメアリの対比は明らかである。家父長的保守性を象徴するファニーに対して、メアリにとって信仰心はもはや形骸化してしまい、個人的自由主義のまえではその意義を失っている。この作品でオースティンは精神的に空洞化してしまった人間の自己中心性を繰り返し描いてみせる。

バートラム姉妹やメアリ達は、幾代にも亘って伝えられてきた伝統を象徴する屋敷の息苦しさから、「ひとつの衝動、外気と自由を求めるひとつの願望」(80)に捕えられたかのように逃れ出て、サザトンの庭園をそれぞれが思惑を抱え、お互いを出し抜くかのように勝手に歩き回る。ヘンリは、マライアの心の内を見透かすかのように挑発する。

「あなたは鍵と、ラッシュワース氏の権威と保護がなければ絶対に外に出ることはないでしょうね。そうでなければ、私が手を貸せば門の端のここを難なく通り抜けられるわけですから。そうできると思いますよ、もしあなたが本当にもっと自由になりたいと願い、そうすることが禁じられているわけではないとお考えになるようでしたらね。」(89)

まさにこの言葉通り、最終的にはマライアとヘンリの出奔へと繋がっていくのだが、ヘンリはバートラム姉妹のみならずファニーまでも、マンスフィールドの外の世界へと連れ出そうとする危険な誘惑者として描かれている。マライアは、ヘンリの巧みな挑発に乗り、門の鍵を取りに行った婚約者のラッシュワースを無視するかのようになり、自らの意志で門を通り抜け、二人だけで外の広々とした野原に出て行く。また、ジュリアも「私だってマライアのしたことぐらいできるわよ、助けがなくてもね」(90)と、彼等の後を追いかける。常に片隅に追いやられ、無視されているファニーは、彼女達の行為が明らかに間違っていると感じても、それを弱々しく忠告できるだけである。ただファニーだけが皆に忘れ去られたかのように、門の内側にじっと留まって動かない。「もし私達に自分の心の内に耳を傾ける気持ちさえあれば、誰でも自分の中に他のどんな人も及びもつかない正しい導き手を持っているものですわ」(376)というファニーの内省は、「私はじっとしていることはできませんの、休むと疲れてしまいますもの」(86)という、メアリ達の言葉にかき消されて行く。第一巻では傍観者としての役割を与えられているファニーの不安な心情を通して描き出されるのは、立ち止まることを恐れ、欲望のままに流されていく利己的な人間の姿である。

庭園改修計画のためのサザトン訪問は、バートラム姉妹やヘンリ、ラッシュワースとの間に不協和音を生み出しただけで、計画は立ち消えになってしまうが、その同じパターンを繰り返しもとれるマンスフィールドでの素人芝居上演のエピソードは、芝居に関わった全員

の内面に大きな影響を与える点ではるかに危険である。マライアとヘンリのみならずエドモンドまでも、「演じる」ことで本来の自分とは異なる存在になれるという誘惑に陥ってしまう。マライアとヘンリは母親と息子を演じながら、内実は恋人同士の密かな恋の語らいの代償行為に他ならない。芝居のリハーサルで、マライアの手を取りそれを自分の胸に押し当てるヘンリの行為を、マライアは彼からの愛の告白と確信する。サー・トマス不在のときに、家中を巻込んでの素人芝居の大騒ぎに異議を唱えていたエドモンドまでも、結局はメアリの相手役を勤める誘惑に負けてしまう。ここでもファニーだけが劇に参加することを拒み、演じることを頑に拒み続ける。ファニーは、「何が正しいのか、どの程度までなら許容されるのかということの、ある種の良心の代行者」<sup>(3)</sup>となっているが、貧しい親類の経済的窮状を救うためにバートラム家に引き取られたファニーのマンスフィールドでの立場の不安定さゆえに、彼女の主張は無視され顧みられることはない。サー・トマスという外側からの権威の後ろ楯なしには、ファニーの「良心の代行者」としての役割は、機能しないのである。そして全員集まったのリハーサル当日、急な用事で芝居の練習に参加できなくなったグラント夫人に代わって、その代役を勤めるように再度強要されることになる。エドモンドまでもがファニーの気立ての良さに訴えかけるように懇願してきたとき、ファニーは譲歩せざるを得なくなる。オースティンは、それぞれの登場人物達が節度や道理を置き去りにし、欲望に突き動かされる状況を描き出すのはもう十分と考えたかのように、突如サー・トマスを帰国させ、素人芝居の場面を打ち切ってしまう。

## 2

サー・トマスの再登場で、彼の留守中にマンスフィールドが如何に変容をきたしたかが改めて浮び上がらせられる。以前と同じ厳格さと勤勉さでサー・トマスは、帰国の翌日から平常の用務に復帰し、執事や差配人に会い検分し、財産状況を調べ計算し、てきぱきと指示を出すと同時に、芝居の痕跡を徹底的に消し去っただけでなく、家中の『恋人達の誓い』の台本をことごとく燃やしてしまう。外見上マンスフィールドは、彼が屋敷を留守にする前の状態に戻される。しかし、秩序と権威を象徴するサー・トマスの書齋が一度は、芝居のための楽屋へと改変されてしまったように、マンスフィールド・パークの住人達の心の中も以前のままではありえない。マンスフィールドが全く別の場所になったかのように、住人の気持ちも沈みがちで、それまでと比べると全てが単調で陰気に感じられ、エドモンドまでもが、余りに変わってしまった暮らしに戸惑いを示す。彼等の輪の外側にいたファニーだけが、サー・トマスが留守にする前も今も何も変わってはいないと感じている。

「…叔父様はあなたのおっしゃっている静寂をこそ大切になさっていて、内輪での安らぎを何よりも望んでいらっしゃるのだと思います。それに私達が以前よりも堅苦しくなったとは思えませんわ。つまり、叔父様が外国にいらっしゃる前と比べてという意味ですが。私の覚えている限りでは、以前も同じようなものでしたわ。叔父様の前では笑ったりすることなどあまりありませんでしたわ。もし違いがあるとしても、暫くぶりに顔を合わせることからそう感じているだけですわ。どうしたって、はにかみのようなものが生じますもの。でも叔父様がロンドンにお出かけになったとき以外には、私達の夕べが以前は陽気に過ごされていたなどという覚えがありませんわ。若い人達は、尊敬

する人が家にいたりすれば陽気に騒いだりしないものだと思いますけど。」(177)

しかし、二年間にも亘る父親の不在中に勝手気ままに自分の意志を通す生活を享受したマライアは、元の生活に戻ったマンズフィールドを今まで以上に堪え難く感じる。そもそもマライアがラッシュワースとの婚約を決めたのは、彼の収入が父親よりも多く、またそのこと以上にロンドンに家を持てることが最大の理由であり、ラッシュワースとの結婚は彼女にとっての「道徳的責務」(34)と考えたからである。メアリ・クロフォードも同じように有利な結婚こそが人生の目的であると言って憚らないが、メアリとマライアの大きな違いは、メアリが誰からも干渉されない自由と独立をもうすでに手に入れていることである。たとえその自由と独立が未婚の女性の立場に伴う制限付きのものだとしても、マライアが経験する父親による管理や束縛への嫌悪感とは無縁である。結婚が「相手から最大のものを期待しておいて、自分自身は不正直である」という「駆引きを伴う取引」(41)であるという、ロンドンの社交術を身につけていながら、その野心がエドモンドへの愛情ゆえに揺らぎをみせるメアリと、傷つけられた自尊心からヘンリに対する腹いせと、父親からの束縛を逃れるためだけに独立と自由を求めて、つまりサザトンの財産と世間的体面、ロンドンの喧噪と社交界を求め、盲目的に飛び出して行くマライアとの違いがここにある。

「家庭と束縛と静かな暮らしへの嫌悪、失恋の痛手、結婚相手に対する軽蔑」(182)という、心の準備がすっかり整っていたマライアの結婚は、明らかに不幸な結末を予感させるものである。しかしサー・トマスはマライアがラッシュワースに冷淡であることに気付いていながら、マライアの結婚への決意を言葉通りに受け取り、あえてそれ以上突き詰めることはない。この縁組の世間的、経済的利点にサー・トマスの判断力は鈍らされ、娘の冷淡な反応も「恋ゆえの偏見、恋ゆえに盲目になることのない」冷静な判断の結果であり、「夫が第一級の輝かしい人物でなくても構わないというのであれば、確かにそれ以外のことであれば全て娘にとって有利だ。気立ての良い娘が恋愛結婚をしないというのであれば、たいていの場合、実家の方に愛着を持つものだ」(181)と、奇妙な逆説的解釈で納得してしまう。完璧な管理者であり、庇護者であるはずのサー・トマスの欠陥が改めて示唆される。知識や才芸といった外面的な教育に注意が払われ、娘達の心の教育に目を向けてこなかった彼の教育の欠陥は、彼自身の欠陥でもある。サー・トマスは、公正さや義務、良識を重んじる庇護者でありながら、一方で彼の価値判断には金銭や財産、世間的な体面といった世間智の計算高い要素が入り込んでいる。彼は人間の内面の問題に関して余りにも楽観的である。サー・トマスが体現する秩序や良識、道徳的規範は上層ジェントリー階級を維持するための根幹を成すものであるが、そのような社会秩序の在り方の中に、見すごせない欠陥があることを示唆している。精神的な核となるべきものを持たなければ、真に望ましい社会秩序は維持できないとオースティンは考えている。

マライアの結婚とそれに伴いジュリアもマライア訪問のためにマンズフィールドを留守にすると、ファニーのマンズフィールド・パークでの役割も増し、小説のヒロインらしく舞台の前面に出てくる。ささやかではあるが、晩さん会や舞踏会といったおきまりの手順をふんでファニーも近隣の社交界に踏み出していく。そしてそれまでは彼女になんの関心も示さなかったヘンリ・クロフォードまでもがファニーに惹かれ始める。舞踏会でファニーが、魅力的で慎ましく、しかも「サー・トマスの姪」であり、ヘンリの賛美的だということによって皆から好意的に受け入れられることにサー・トマスは、大いに満足し、その姪の教育と礼儀作法

に心砕いたのは彼自身であることを心密かに自慢する。

ヘンリがファニーに興味を抱いたのは、ファニーがマライアやジュリアと違って、彼の誘いかけに応じるどころか拒絶の姿勢を示したことで、彼の征服欲がかき立てられ、ぜひともファニーの心に小さな穴をあけ、自分がいなくなったときにはもう二度と幸せにはなれないという気持ちにさせたいと思ったからだった。しかし、ヘンリは気紛れで自己中心的ではあるが、ファニーが本物の感情を持てる人間であり、心から信頼できる人間であることを認識できるほどの道徳的判断力を備えており、ファニーの資質を理解できる人物でもある。オーステインが姉に宛てた手紙の中で、「(兄の) ヘンリはヘンリ・クロフォードを賞賛しています、とても気に入っているのです、才気があり感じが良い男性として」<sup>(4)</sup>と述べているように、ヘンリ・クロフォードは単なる放蕩者ではなく、メアリと同様に知的で魅力ある人物として造型されている。芝居の稽古では誰よりも巧みに演じ、また朗読においても王から家臣まで思いのままにそれらの人物になりきり、どのような感情も巧みに劇的に表現してしまう才能の持ち主であるヘンリは、ファニーの真摯さに合わせるかのように誠実な求婚者としての役割を演じることになる。

ヘンリの求婚は、財産や社会的体面を重んずるサー・トマス世俗性を改めて浮び上がらせる。「教育も財産も引きになる縁者もない海兵隊の一大尉」の娘として生まれ、無一文のファニーにとって、地主階級に属するヘンリからの求婚は願ってもない良縁のはずである。社会的地位、財産、人柄や物腰のどれをとっても申し分ないと考えるサー・トマスは、ファニーの拒絶に驚愕する。ファニーは、エドモンドへの秘めた想いを胸に抱き、本心をあかすこともできず、しかもこれまでのヘンリのいとこ達に対する不誠実な振舞を話すこともできず、あいまいな拒絶の理由を繰り返すだけである。

ファニーは、洞察力があり高潔な人物であるサー・トマスなら、彼女の側にヘンリへの愛情がないことを述べれば、それで十分納得させられるものと考えている。しかし物事の表層しか見えないサー・トマスは、ファニーの心の内まで入り込むことなく、マライアの場合とは異なり皮肉にも、ファニーを「我儘で強情で利己的で恩知らず」で、「子としての義務、親への敬意」を蔑ろにしていると非難する。

「…私は我儘な気性や自惚れ、あるいは若い女達の間でも近頃大流行の精神の自由とやらを求める傾向、そういうものが若い女達に見られることは腹立たしく、不愉快極まりないと思っているが、おまえはそういったこととは無縁だと思っていた。しかし、おまえは我儘で強情な人間で、多少なりともおまえを教え導く権利を持っている人達への配慮も敬意も見せず、助言を求めることさえせずに、自分の一存できめてしまう人間であることをたった今、この私に見せてくれた。…この縁組によっておまえの家族がどれほどの恩恵を蒙るか、またどれほど喜ばしく思うかというようなことは、おまえにとってはどうでもいいことなのだ。おまえは自分のことしか考えていない…。」(288)

パートラム家におけるファニーの立場の曖昧さは、彼女がマンスフィールド・パークに引き取られたときからつきまとっているものである。ファニーは常に、パートラム家の人々からの有形、無形の圧力を受けている。素人芝居への参加を頑に拒んだファニーに向かって、「叔母様やいとこ達が望んでいることをしてあげないなんて、とても我儘で恩知らずなことですよ。自分の立場を考えてごらん下さい、本当に恩知らずですよ」(133)と非難するノリス夫

人ほどあからさまではないが、サー・トマスの方には、ジェントリー階級の正当な構成員とは成り得ないファニーによる身分不相応な拒絶への弾劾の調子が込められている。

さらに加えて、ファニーにとって厄介なことは、「愛のない結婚」を選択したマライアの場合とは逆に、「愛のない結婚」を拒否する姿勢が、サー・トマスからは「子としての義務」を蔑ろにしていると見られることである。ヘンリー・クロフォードは、ジェントリー階級が最も重きを置く土地財産、収入、社会的地位、これら全てを持つ申し分のない求婚者である。良き収入が良き人間と容易に同一視されうる社会では、社会的権威に個人の良心は押しつぶされ、ファニーの拒否は単なる個人的気紛れの愚かな行為にすぎないと解釈される。サー・トマスにはファニーが主張する「どのような人間も心の内に導き手を持っている」という内省は理解できないものである。ファニーは、「娘をラッシュワース氏に嫁がせた叔父だもの、ロマンティックな繊細さなど期待すべくもない」(300)とサー・トマスの世俗的な現実主義に忍従するが、公正さや正義を尊重するサー・トマスが示している秩序の中にも欠陥があることが顕にされる。マンスフィールド・パークにとって真の脅威となるのは、クロフォード兄妹のような外から侵入し「秩序と伝統」に改変を加えようとする存在ではなく、その中にいる人間の内面的な空虚さであり、人間の行為や価値判断に関する道徳的識別力や洞察力の欠如なのである。

## 3

この作品では、ロンドン、ポーツマス、マンスフィールドの三つの地域が明確に描き分けられている。クロフォード兄妹により象徴されるロンドンは、その物質的豊かさや洗練された優雅さでマンスフィールドの住人を幻惑し引き寄せるが、最終的にはマライアの出奔と追放に象徴されるように、マンスフィールドには有害なものとして徹底的に否定され、排除される。マライアのマンスフィールドからの追放は、サー・トマスがアンティグア島から帰国したときに、屋敷から素人芝居の痕跡を断固として消し去る姿勢以上の非情さで徹底的に行われる。確固たる行動規範をもたず、個人的欲望充足と物質的利益追求が全てに優先する社会の象徴として、ロンドンは否定されている。

では、軍港として発展しつつあったポーツマスは、どのような意味合いを持たせられているのだろうか。十歳の頃に突然、見知らぬ親類のバートラム家に引き取られたファニーにとっては、ポーツマスの実家は依然として十歳の子供の頃のままに帰るべき家である。さらに時間の経過と共に郷愁も加わり、理想化された家庭像が作り上げられている。実家に帰ることは、「家族の中心になり、あんなにも多くの人達から愛され、しかもこれまで経験したことのないくらい皆から愛され、不安も遠慮もなく愛情を感じ、周りの人達と対等であることを感じられる」(336)喜びをもたらすはずであった。しかし、兄のウィリアムからすでに彼等の実家が「どういう訳かわからないが、ファニーのような行儀の良さやきちんとしたところがなく、家はいつも混乱状態にある」(338)という不満が漏らされているように、実際のプライス家は無惨なまでにファニーの期待を裏切り、絶望的な無秩序の様相を呈している。

…ここでは、誰もが騒がしく、誰もが大声をはり上げた。…何か入り用のものがあると大声で呼びかけ、女中達も台所から大声で言訳を喚きかえしていた。ドアはたえずバタン、バタンと音をたて、階段は静かになることはなく、何をするにもガタガタと音



をたて、誰一人じっと座っていることもなく、話をしても誰一人まともに聞いてもらえなかった。(357)

ファニーが夢想していた肉親の情愛や平安のみならず、礼節や秩序、調和とは無縁の世界である。プライス家が象徴するポーツマスは、ロンドンのようなきらびやかな悪徳とは無縁であるが、日々の暮らしに追われ、精神的にも物理的にも困窮状態にある。狭い空間に押し込められ、無秩序と無作法が支配する下層中産階級のプライス家の現実、経済的豊かさの意味をまざまざとファニーに見せつける。マンスフィールドによって象徴されるジェントリー階級には、たとえその内部に望ましくない要素を抱えているとしても、少なくとも礼節を通してたらされる秩序や調和が存在し、礼節は経済的豊かさが伴ってこそ機能するとオースティンは考えているようだ。口論や感情的な爆発や乱暴な足音も聞かれず、「全ては快い秩序正しさで規則正しく運んでゆき、誰もがしかるべく重んじられ、皆の気持ちが考慮され、情愛に欠けるところがあるとしても、良識と育ちの良さがそれを補っている」(357) マンスフィールドは、その不完全さにも関わらず、「良識」や「育ちの良さ」がその埋め合わせをしている。ジョンソン博士の言葉をもじって「マンスフィールド・パークには、多少の辛さはあるかもしれないが、ポーツマスには何一つ楽しいことがない」(357)というファニーの教訓めいた口調からも、オースティンが共感を寄せているのはマンスフィールドの方であることは明らかである。

ヘンリからの求婚を拒否するファニーに貧しい実家の状況を体験させ、経済的豊かさのもたらす安寧と快適さの意味を悟らせるというサー・トマスは、彼の世俗的な世間智から思い付いたことではあるが、単にジェントリー階級の優位性をファニーに認識させる以上の意味合いを持っている。本人の意志とは無関係にマンスフィールド・パークに連れてこられた十歳の時のファニーと異なり、ファニーは自らが所属すべき場所としてマンスフィールド・パークを自らの意志で選び取る。

ポーツマスにやって来るとき、彼女はそこを好んで我が家と呼び、自分は家に帰っているのだと言えることを喜んでいて。我が家という言葉は、彼女にとってとても大切な意味を持っていたのだ。今もそれに変わりはないが、その言葉はマンスフィールドにこそ当てはめられるべきであった。それこそが今は我が家であった。ポーツマスはポーツマスであり、マンスフィールドが帰るべき家であった。(392)

十歳の時のファニーのようにマンスフィールドに選ばれるのではなく、自らがマンスフィールドを選ぶのである。富や血筋ではなく、自らの有用性によりファニーはマンスフィールドに自らの居場所を確立する。ファニーは、マライアの出奔とジュリアの駆落ちにより混乱状態に陥ったマンスフィールド再生の精神的支柱となり、「サー・トマスが心から欲しいと願っていた通りの娘」(431)として、実の娘達に代わってマンスフィールドの存続を担っていく。「ジェイン・オースティンと帝国」の中でサイドは、マンスフィールドを中心とした同心円的に広がっていく世界にファニー・プライスを据えて、マンスフィールドの精神的な女主人と化したファニーを、「一つの半球、二つの大洋、四つの大陸にまたがる利益と関心のアーチの中心に位置付ける」ことにより、マンスフィールドの管理と拡張を、当時の英国の領土支配や獲得の帝国主義的拡張に大胆に重ね合わせている。<sup>(5)</sup>ファニーの延長線上にヴィクト

リア女王が出現することになるわけである。そこまでマンスフィールドを壮大な繋がりの中に入れておくことには、いささか躊躇の念を覚えるが、少なくとも言えることは、上層ジェントリー階級の維持、存続のためには、絶えず外部から望ましいものを取り込んでいく必要がある、とオースティンが考えていることである。ちょうどファニーの兄、ウィリアムが英国海軍の軍人としての活躍で国家に貢献していくのと同じように。

『マンスフィールド・パーク』は、ファニーという生来の美德をもった人間が、エドモンドという良き導き手を得て、さらにサー・トマス富の力で優雅さや礼儀作法を身につけて、ジェントリー階級の正式の一員として受け入れられていく物語である。ファニーに続いて、彼女の妹のスーザンが自ら望んでマンスフィールド・パークに落ち着くように、マンスフィールド・パークは有用な人間を受け入れていく。マンスフィールド・パークに象徴されるジェントリー階級に有用な人材として送り込まれていくのが、プライス家のファニーやウィリアムのように、自らの意志と勤勉さで功績と名を上げていく人々である。オースティンは『マンスフィールド・パーク』において、階層間における移動と補完の関係を描いてみせる。

## 結 語

レイモンド・ウィリアムズは、「ジェイン・オースティンの場合、彼女の作品の込み入った社会描写にも関わらず、屋敷の内側からでは階級を眺めることは不可能である。彼女の識別力が内輪的で、排他的なものももっともなことである。彼女に関心があるのは、改善改良の複雑な状況の中で、ある階級に入り込もうと繰り返し努力を重ねる人々の振舞である。しかし、一つの階級しか見えていないところでは、他の階級など存在しないのだ」と述べている。<sup>(6)</sup>確かにこの作品は、ファニーとエドモンドが結婚してマンスフィールドの牧師館に落ち着き、その牧師館は過去に経験した苦しい緊張感や不安にも関わらず彼女にとって、「マンスフィールド・パークの視界と庇護の下にある他の全てのものが昔からそうであったように」(432)、このうえなく大切なもの、申し分なく完璧なものとなった、と締め括られている。ファニーのマンスフィールド・パーク礼讃の表現から透けて見えるのは、オースティンの視線はジェントリー階級という一つの階級にのみ向けられているということである。たとえその中に好ましくない要素が存在するとしても、イングランド社会の中核として社会秩序の根幹を担っていくのはジェントリー階級であり、その存続を保証するものは血脈ではなく、絶えず外の世界から望ましいものを柔軟に取り込み、補完していこうとする社会的寛容さなのである。

オースティンの視線は、ジェントリー階級に向けられているとしても、その階級を固定したものとは考えていないようである。オースティンが関心を持つのは、ジェントリー階級の正当な継承者とは誰かということである。この問題は、オースティンの最後の完成された小説となる『説得』に、よりはっきりと読み取れる。17世紀から続く由緒ある準男爵家に生まれたサー・ウォルターは、「神によって与えられた地位を維持していくだけの道義も分別も持ち合わせていない、愚かな浪費家」<sup>(7)</sup>で、借金返済のために家屋敷を人に貸して立ち退かざるを得なくなる。「留まるに値しない者が去り、ケリンチ館はその持ち主よりも立派な人々の手に渡る」<sup>(8)</sup>ことにより、新たな借地人となった新興階級の退役軍人の提督が準男爵に代わってその責務を担うことになる。オースティンの描くジェントリー階級は、その望ましい

存続のために時には階層間の置き換えが行われうる階級でもある。

註

- (1) Austen, Jane. *Mansfield Park*, Oxford University Press, 1980, p.17. 本書からの引用は以後、本文中にページ数のみを記す。
- (2) Tanner, Tony. 'The Quiet Thing: *Mansfield Park*,' in *Jane Austen*, London: Macmillan Education Ltd., 1986, p.145
- (3) Said, Edward W. 'Jane Austen and Empire,' in *Culture and Imperialism*, London: Vintage, 1994, p.103
- (4) Austen, Jane. *Jane Austen's Letters to Her Sister Cassandra and Others*, ed. Chapman, R. W., Oxford University Press, 2nd ed., 1969, pp.377-78, No.92. カサンドラ・オースティン宛、1814年3月2日
- (5) Said. *op. cit.*, p.101
- (6) Williams, Raymond. 'Three around Farnham,' in *The Country and the City*, New York: Oxford University Press, 1975, p.117
- (7) Austen, Jane. *Persuasion*, Oxford University Press, 1980, p.234
- (8) *Ibid.*, p.119